

こころを軽くする重いスムージー

臨床心理士、カウンセラー

榆木 佳子

人生二つ目の大学の建築科で学ぶ彼女は手抜きが出来ない性分で、教授が出す課題にいつも百二十パーセントの提出物で応える癖がどうしても抜けない。

健康で暮らすためには毎日二百五十グラムの野菜を摂りなさい、と医師や栄養の専門家がテレビで訴えている。無視することもできずに「そんなものかなあ」と、二十年前の手術以来、小さくひ弱になった胃を酷使している。

いつもよく行くスーパーで、ひとが摂るべき一日分の野菜が僅か二百ミリリットルに濃縮されたスムージーを見つけた。

野菜料理はなにかと手間がかかるので「これを毎日一本ずつ飲むのはお手軽で良いね。量が少ないから負担にならずに飲めるだろう」とケースごと買い入れた。

飲んでみると、味は悪くないが濃厚すぎてわたしの胃には少し重い。

浦和に住んでいる五十歳半ばの二女が、再び暗礁に乗り上げたらしい。

なるほど一学年百三十九名のなか一番という成績で、二年、三年へと進級してきたが、ここに来て又もや自分が創りたいものとそれを建築模型にする時間とのせめぎあい、バースト寸前に追い込まれているらしい。

「大学辞めたくなった。買い物に行く時間もないし、ご飯を作る時間もないし、食べる時間もなければ、眠る時間もない」

電話で縷々訴えられると、「うん、大学辞めた方が いいね」とあっさり突き放すこともできずに往生際の悪いわたしは、医師の予約をキャンセルして宇都宮から娘の「ご飯作り」のため浦和に向かった。

降りしきる雨のなか車で駅に迎えに来てくれた彼女はたしかに顔色が悪く頬もこけていた。制作中の建築模型を見せてもらおうと「うーん、凄いいねえ!」と、思わず呻ってしまう。アイデアは無尽蔵にはとばしり出るものの、それを

模型として具体化する時間は当然膨大なものになる。

「あなたは自分で自分の首を絞めているよ」と秘かに思うが、本人にもどうにも出来ないことなのだろう。好きなことをやっているのだから、それを「良し」とするしかない。母親としてはなんとかこの局面を無事に生き延びて欲しいという気持ちだけだった。

娘の家で三泊四日、ひたすら食事や常備菜を作った。

自宅に戻って来てから、その日のうちに宅配便でスムージーを送る手配をした。

翌日には娘の家に届き、驚きと喜びのスタンブが華やかに送られて来たまでは良かったが、孫娘の「サヤカがいま試験中でタイヘンなところだから、そこにも送ってやってもらえませんか」と追いかけるようにメールがきた。

今どき宅配便の送料だって馬鹿にならないのに「なかなか大胆な依頼だね!」と思いながら、医学生の子孫娘がいる富山にもスムージーを一ケース送った。

もうこうなったら、東京で働く独身の孫息子にも送ってやろうか。いやいや、朝早くから那須塩原市に通勤している長女娘にだって贈ろうじゃないの。

連日一ケースずつ買いに行くので店の人も驚いている。

「ゼーんぶわたしが買い占めるから、また仕入れておいてね」と、ほとんど自棄みたいに大言壮語して一緒に笑った。

わたしの財布と胃には重くても、離れて暮らす家族の健康を願うならあのスムージーは最適解だった、とスキップでもしたい気分で帰路にいった。